しろね図書館だより

発行 新潟市立白根図書館
No.59 平成17年4月1日

桜の花が咲く季節になりました。

白根市も、新新潟市となり、新たなスタートを始めました。しろね図書館も、メンバーが2人代わり、新しい「しろね図書館」として、これからまたスタートします！

暖かくなって、新しい何かに挑戦する良い機会です。ぜひ挑戦して下さい。でも、ひとまず図書館で本を読んでから。

3月の
来館者（らいかんしゃ） …… 13,919人
貸出冊数（かしだしさっすう） …… 13,818冊
予約件数（よやくけんすう） …… 182件

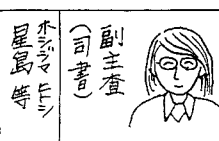
ブックバス利用者 …… 225人
ブックバス貸出冊数 …… 627冊

リクエスト情報（しばらくお待ち下さい）
1位・世界の中心で、愛をさけぶ（9名）
2位・ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団（7名）
3位・キッパリ！日暮らし 蛇にピアス（4名）
6位・いま、会いにゆきます 頭がいい人、悪い人の話し方（3名）他

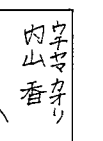
「しろね図書館」今年度のメンバーです。どうぞよろしくお願いします。

7人のメンバーにきいてみました
① 子どもの頃なりたかった職業
② 今までで感動した本
③ 自分を動物に例えると…

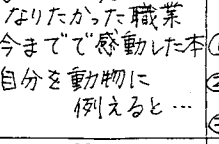
館長 サカイ ジュイチ 坂井治一
① 「パイロット」
② 「あゝ無情」（レ・ミゼラブル）
③ （兎と亀の）「カメ」



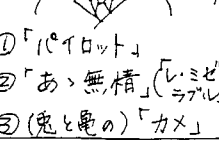
館長補佐（春係長兼務） ホシジマ キヨシ 星島清
① 「税理士」
② 「グッドラック」
③ 「ねずみ」



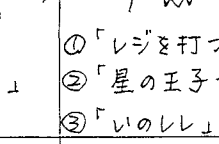
副主査（司書） ウチヤマ カオリ 内山香
① 「レジを打つ人」
② 「星の王子さま」
③ 「いのレレ」



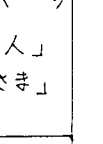
主事 シミズ タカシ 清水隆
① 「水族館の職員」
② 「ソーントーン・サイフル」
③ 「ペンギン」



主事（司書） オオノ ケイコ 大野恵子
① 「パン屋さん」
② 「おやすみなさいトムさん」
③ 「いぬ」



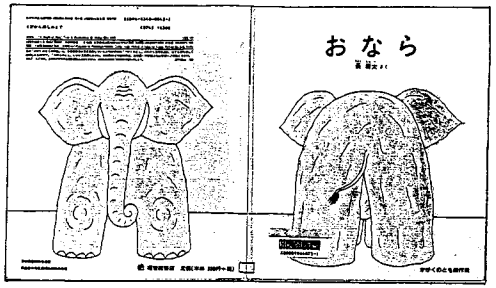
主事（司書） ナカガワ ヨリ 中川沙穂里
① 「ケーキ屋さん」
② 「片手いっぱいの星」
③ 「キツネ」



主事（司書） スガシ トモハル 小林友治
① 「新聞記者」
② 「鹿よ、おれの兄弟よ」
③ 「のらネコ」

子どもたちといっしょに

「おなら」（福音館書店）
長 新太 さく



おならが〝ぶおお～ん〟なんてはずかしいことじゃない。

おならがでるのは、健康な証拠だし、食べ物を食べているから。

おならは、どうしてでるの？ どうして臭うの？ おならのしくみを絵本でわかりやすく紹介しています。最初のページにはぞうの大きなおなら！ 声に出して読むと、子どもたちはきっと楽しんでくれます。ぜひ、一緒に読んで下さい。

しろね図書館友の会は、しろね図書館で、文化的な行事（講演会・原画展・読書会・おはなし会など）を通して、図書館をバックアップしていこうという会です。ご一緒に、楽しい活動を考え、企画し、友だちをたくさんつくりませんか。詳しくは事務局（図書館）までご連絡ください。

第54回読書会

「尋ね人の時間」
新井 満 著
（文芸春秋）
日時・4月17日(日) 1:30～3:30
場所・ルーム2

＝作品紹介＝
友人の個展に出席したカメラマンの神島は、会場でモデルの卵の圭子に出会う。しかし、神島はどうしても圭子を受け入れられない。現代人の心の空洞を描いた作品。

本が泣いています。
図書館の本はみんなのものです。大切にしましょう！

4月の行事　ブックバス

2（土）	おはなし会 3:00～		17（日）	第54回読書会 1:30～	
6（水）	絵本のじかん 3:00～		20（水）	絵本のじかん 3:00～	根岸小 13:10～13:50 大通小 14:00～15:30
9（土）	おはなしかご例会 10:00～ おはなし会 3:00～		21（木）		白根北中 13:00～14:00 大鷲小 14:30～15:45
13（水）	絵本のじかん 3:00～	新飯田小 12:35～13:20 茨曽根小 13:30～14:30	22（金）		白根小 13:00～13:50 小林小 14:30～15:30
14（木）		白南中 12:55～13:35 左瀬地C 14:00～14:40 左瀬小 15:00～15:45	23（土）	おはなしかご例会 10:00～ おはなし会 3:00～	新飯田農公 14:30～15:00 戸石公 15:30～16:00
15（金）		白井中 12:55～13:35 白井小 14:00～15:15	27（水）	第25回 あかちゃんがはじめてであうほん 絵本のじかん 3:00～	新飯田小 12:35～13:20 茨曽根小 13:30～14:30
16（土）	おはなし会 3:00～	大通地C 14:30～15:00 根岸農公 15:30～16:00	28（木）		白南中 12:55～13:35 左瀬地C 14:00～14:40 左瀬小 15:00～15:45

第五十三回読書会

平成十三年 年三月十三日（日）

参加者八名

『柳橋物語』 山本周五郎 著

（新潮社）

元禄時代、おせんは上方へ行ってしまう幼なじみの庄吉に、若さゆえに「待っているわ」と、この後の一生を決める返事をしてまう。それからのおせんは過酷な運命に翻弄され、悲しい人生を送ってしまう。

しかし、結末では真実の愛に目覚め、孤児であった幸太郎と本当の家族を求め生きていこうと決心する。

＊＊ 参加者の感想 ＊＊

児童文学が続いていたので、こういうおとなのものが新鮮に感じられ、読んでいて、いろいろな食べ物や言葉などを聞いて、こういうもの（こと）を「粋」って言うんだろうなと思った。

おせんの生きざまはとても辛くて自分ではとても同じようには生きられないと思った。

作者は男性なのに、本当によく女性の心理や気持ちの変化を描写していると思う。作品には書かれていないが、おせんの気持ちの細かい所までつかめた。

安心して読めなかった。どうしても、最後おせんがどうなっていくのか気になって、結末を先に読んでしまった。それでも、泣いた。おせんと同じ気持ちになって涙が止まらなかった。

庄吉が上方へ行く前におせんに「待っていてくれ」と言ったが、その後は、手紙はよこすなとか言っておせんに対して冷たすぎる。おせんは庄吉に本当の恋心を抱いていたんじゃないかな。突然遠くに離れてしばらく会えないことを知り、突然待っていてくれと言われたから感情が高ぶったんだと思う。いわば恋に恋したんだと思う。好きだったというよりも庄吉を待っている時に好きになっていったんだと思う。

たった十七歳でこの先の人生の決断をしなければならなかったというのは辛かったと思う。今で言うとまだ子どもなのに、これだけ災害や身近な人の死に遭っていても生きていけたのは周りの人たちの支えがあったからだし、庄吉との約束があったからだと思う。

この時代吉原やなんかで身を売って商売するところもあったが、おせんがそれをしないで生きていこうとしていたのが強い意志を感じた。

最後の場面で、おせんが本当に想いを寄せていたのは幸太だったと気がついたところが、なんとも言えない心境になって泣いた。2回目に読んだとき庄吉の身勝手さに腹が立った。

以前、テレビのドラマになっていたのを思い出したが、火事の場面がすごくて印象が残っている。江戸時代の建物の多くは、特におせんが住んでいるところは長屋だろうが、そういうところなんて燃えやすいものばっかりで今の私たちには想像できないくらいの火のまわりが速かったんだろう。

当時は周りのみんな一様に苦しい思い、大変な思いをしていたから、火事や水害にあっても自然と周りとの助け合いができていたのだろう。去年の新潟で起こった災害を思い出した。

庄吉がおせんに許しを乞いにいったがおせんの毅然とした態度に女の強さを感じた。この先おせんがどう生きていくのかすごく気になった。

周五郎の作品は、これだけに限らず内面の描写に優れているのでなかなか映像にするのはできないと思う。

次回は四月十七日（日）
「尋ね人の時間」新井満著

本は、図書館カウンターで貸し出しています。どなたでも参加できます。ぜひおいでください！

（小林 友治）

～図書館員がおすすめするこの１冊～

後宮小説

酒見 賢一（新潮社）

（一般 913サ）

“コウキュウ小説”
……とはまた、いささか人を食ったタイトルだと思いませんか？
そして、ページをめくると目に入る、大胆な書き出し。
この物語、ファンタジーとしてはちょっとばかり「くせもの」ですよ。

■どんな話？

時は１７世紀。後宮を舞台に、奔放な田舎娘「銀河」が活躍する物語。

ある中国王朝の興亡が、後世の史家の視点から語られます。素乾（そかん）という国の歴史書をもとに、想像によって拡がる枝葉を膨らませて書き記したのが本書です。

主人公の銀河は、村を訪れた後宮の使者に見込まれ、宮女候補に選ばれます。都に上がった銀河は、「女大学」で他の宮女候補の少女たちと一緒になって奇抜な講義を受けることに。しかし、国内では叛乱軍が蜂起し、国を蹂躙しようとしていました。銀河は、取り残された後宮の女達を率い、叛乱軍に立ち向かうのですが……。

■中国の話なの？

この素乾なる国、本当は架空の王朝なのですが、面白いのは「フィクションであること」に対する独特の距離感です。歴史的事実を書き留めた形式のこの物語は、さながら、かつて中国で本当に起きたことのように語られます。そもそも、作者が資料と称している「素乾書」「乾史」などの史書からして創作だったりします。さらには後世の史家の見解がしばしば挿入されるなど、そこには「もうひとつの中国史」が完全に構築されています。

■後宮っていうと……まさか？

そのまさかですが、心配はいりません。ちなみに、後宮というのは、日本で言えば江戸時代の大奥のようなものです。「三食屋寝つき」に惹かれて後宮の門をくぐった銀河。他の宮女候補たちとともに、後宮で必要とされる「さまざまなこと」を学ぶことになります。つまりは房中術の講義ですが、それがちっとも卑猥ではありません。それはむしろ哲学であり、爽やかに語られます。

後宮という湿っぽくなりがちなテーマを扱いながら、ドロドロした愛憎とはまったく無縁の、思春期の少女の成長を描いた爽快な物語に仕上がっています。

■どんなキャラクターがいるの？

主人公の銀河は、屈託がなく、素直で好奇心にあふれた少女です。この物語が、全体的に重い状況を描きながらも、軽やかな読後感を残すのは、彼女のあっけらかんとした性格によるところが大きいでしょう。また、後宮が舞台となっているだけあって、多くの魅力的な女性たちが登場します。みな、一癖も二癖もありますが、いずれも生き生きと描写されています。ほかにも、女大学の先生との哲学めいたやりとりや、賊として登場する渾沌（こんとん）のつかみどころのなさなど、男性陣にも見どころがいっぱいです。

中国の乾いた風のように、軽く澄み渡った読了感。
中国ものであり、歴史ものであり、ガールミーツボーイであり、ファンタジーでもあるこの作品。
どの先入観から入っても、きっと、いい意味で裏切ってくれますよ。

（清水 隆）